中央大学学員会
国立支部
国立白門会ニュース
第50号
中央大学学員会
国立支部
発行者　小島泰義
042-575-1454
http://www.gakuinkai.com/kunitachi/

第三十九回　総会を迎えて

支部長　小島泰義

平成二十五年六月に就任し早くも三年目を迎えることが出来ました。

これも会員、役員みなさまのご協力の賜物と心よりお礼申し上げます。

その上、私、平成二十七年度には体調を崩し皆様方に大変ご迷惑をかけまして申し訳ございません。皆様の温かいご理解と、ご協力により事業も順調に進行することが出来ましたことに対し衷心よりお礼申し上げます。

お陰様をもちまして体力も順調に回復に向かっております。このような中、幹事長をはじめ皆様方のご協力を得ながら精一杯努力するつもりでおりますので、ご支援賜りますよう、お願い申し上げます。

支部の活動につきましては「くにたちさくらまつり」「ボーリング大会」「バーベキュウ」「くにたち市民まつり」「まと火」「くにたちウォーキング」など地域に密着した活動を行い、地域発展の一助になるよう積極的に運営いたしております。

また、会員相互が親睦を深め、楽しいひと時を持つ機会も必要であると思っています。

さらに、母校中央大学の発展のために、ホームカミングデーへの参加、大学主催の学術講演会などに積極的な支援を行っておりますが、さらなる母校発展のためには、学員が一つになって大学関係者との交流等の推進を図っていくことも大切であると考えます。

また、箱根駅伝予選会での応援も四年続けて経験しましたが前回の本番の成績は十五位。総合優勝十四回と九十回の出場を誇る名門校がさびしい限りでございます。監督も交代し、シードをめざして今度こそ頑張っていただくため、さらなる応援が必要です。皆さんと一緒に盛り上げていきたいと考えております。

今後、母校中央大学が存する地域支部の連合体としての三多摩地区連絡協議会の果たす役割も重要であり、近隣支部の皆様とも連携をさらに深め、積極的に交流を図っていく所存です。

国立白門会が例年開催する行事等に多くの学員に参加いただくことが会の発展につながることと考えておりますので積極的にご参加くださいますようお願い申しあげます。

最後に会員各位のご支援ご協力を賜りますよう重ねてお願い申し上げます。

平成二十七年度　第三十八回　定時総会

平成二十七年六月二十一日(日)午後三時より、せきやビル「エソラホール」にて総会が開催された。来賓として学員会から大木田副会長、近隣支部から斉藤小金井支部長、山崎立川副支部長、栗山日野支部長、出口小平支部長、森本府中支部長、小山国分寺支部長、山本国分寺支部幹事長、他大学から早稲田大学国立稲門会の石井昌浩会長、明治大学国立地域支部の土屋栄一支部長のご臨席を賜り、重野顧問の司会のもと石井副支部長の挨拶後に阿部理事が議長に選出された。活動報告、決算報告、活動計画案、予算案、役員改選案が審議され満場一致で承認されました。

懇親会は平本副幹事長の進行のもと歓談の輪が広がり、国立音楽大学出身の女性奏者「トリオdeムジーチエ」によるチェロ2＋ピアノの奏でる美しい名曲の調べに大いに盛り上がりました。最後は校歌と応援歌を力強く歌い上げ閉会となりました。

石田進　記

『海の日』は恒例の納涼会

七月二〇日（海の日）、昭和記念公園のバーベキューガーデンで納涼会を開催しました。申し込み電話の際「毎年ご利用ありがとうございます」と国立白門会はすっかり馴染みの客となっていました。

買い出し組は西立川駅前のスーパーで飲み物を調達、会場係は駅の改札で参加者を出迎えて会場に向かった。当会場は道具一式、さらに食材も用意してくれるということで若者グループに大人気。すでに主だった場所は彼らが占拠。但し、我がグループは予約済で安心。当日は炎天下にもかかわらず、新会員や会員の友人も遠くから参加していただき、二〇名が集まりました。会長の乾杯もそこそこに、先ずは冷たいビールで喉をうるおしました。肉や野菜を焼き、差し入れられたビール・ワイン・酒が次々に飲み干されました。

周りのグループは若者ばかりで、中高年の国立白門会がひときわ目立ちました。飲むことにかけては若い連中に引けを取らない自信の持ち主ばかりの我々ですが、食べる量は寄る年には勝てず、肉や野菜が余ってしまいました。隣の若者グループに差し入れたところ大喜び。我々のテントには「中央大学白門会」のプレートが結ばれていたこともあり、「僕も中大卒です」と名乗る若者もおり、先輩、先輩と持ち上げられて、いい気分になり、立川の居酒屋で反省会といいながら散会となりました。

石井 孝　記

「秋の市民まつり」

平成二十七年「くにたち市民まつり」は十一月三日（祝）秋晴れのもと大学通りで開催され、国立白門会も例年通り出店しました。

白門会のブースには会員をはじめ夫人、支援者ら約三十名が参集し設営から物品の販売にいたるまで大変なご協力を頂きました。国立白門会の出店は今年で連続三十四年になり、市民の皆様に親しまれてきました。今年も磯辺焼きをメインに会員から提供された品々を販売いたしました。

磯辺焼きは餅焼何十年のベテラン先輩が担当し、炭火で顔を真っ赤にしながら餅を焼き上げ、香ばしい醤油をつけてから高級海苔を巻いて、手際よく透明パックに三個詰めて輪ゴムをかけて完成。「いらっしゃい」の掛け声で約三百五十パックをあっという間に売り切りました。

次にこれまた名物の重野さんの丹精こめた色鮮やかな「八ヶ岳唐辛子」も即、売切れとなりました。

そして毎年堀田さんが提供する色とりどりの造花や衣類。また会員から提供された品物も多数あり販売に弾みをつけました。売上もトータルで約十三万円となり、大盛況でした。

「僕も卒業生です」と我々のブースに立ち寄られ、それを機に入会した同窓もおられます。次回も是非多数の皆さんの参加をお待ちしております。

上田 邦雄　記

「変わらぬ街」

平成一八年法学部卒
佐々木理央

一、桜のある風景

私にとって、国立への思いは人一倍強い。生まれた時から現在に至るまで長年国立の駅を中心に生活してきた。細かいことをいえば私の自宅住所は国分寺市であるが、土地柄、私と同じように国分寺市民も国立駅を利用し、国立という街に愛着がある人も多いだろう。

そして、国立といえば桜である。昭和初期に開発された国立大学通りは、当時殺風景だったことから、昭和八年、現明仁天皇の誕生を記念して桜を植樹したらしい。この植樹が「関屋」の初代 関喜太郎氏の賜物であることはご存じの通りである。

また、昭和四二年には、富士見台団地の完成に合わせて建設された新しい道路の両側にも桜が植樹されることとなり、昭和五七年、公募によってその道はさくら通りと命名された。

私は、さくら通りと命名された昭和五七年に生まれ、桜とともに成長してきた。一人前の社会人となるべく一時期は国立を離れていたが、昨年立川へ事務所を立ち上げることとなり、地元に戻ってきた。以前のように国立駅を利用し、今年で三三歳。またこうして桜の木を見上げることとなった。

さくら通りも、命名されて三三年。桜の木も近年樹勢が弱まり、倒木や接触事故の危険性があることから植え替えが開始されている。

古い木々には「お疲れさま。いままでありがとう。」、新しい木々には「初めまして。これからは君たちの時代だ。」と伝えたい。そこには、これからも変わらない桜の風景がある。

二、三角屋根のある風景

国立のもう一つのシンボルといえば、旧国立駅舎である。

旧駅舎は、昭和元年に開設された赤い三角屋根と白い壁をもちいた洋館風の外観で、言わずと知れた国立の象徴だった。平成一八年には、国立市の有形文化財にも指定されたが、同年中央線の高架化に伴い、惜しまれつつ解体された。市は、将来の復元のために部材を保存し、元の場所への再築を目指している。

国立の駅といえば、私の記憶の中にはあのノスタルジックな駅舎が思い出される。そして、春になると旧駅舎内では、毎年つばめが巣を作っていた。

駅員の気の利いた計らいであろうか、当時つばめが巣を作りやすいよう壁に木が打ちつけられており、毎年、子つばめが誕生し、その成長を大切に見守ってきた。つばめも多くの住民に大事にされ、さぞ居心地が良かったであろう。

旧駅舎の再築は、早ければ二〇一八年には着工が始まり、二〇二〇年の完成を目指して進められている。

町のシンボルの復活は、市民のみならず、つばめも待ち望んでいるだろう。

三、国立の魅力

国立の魅力、それは変わらない街ということだ。

確かに、植え替え中の桜並木や新たな駅舎のみならず、新しい店も増え、国立が変わらないといえば嘘になる。

しかしそういった表面的な変化が国立の魅力ではない。

桜並木を守ること、旧駅舎への想い、地元民が愛した様々な風景や街並みは、今も地元民のこだわりとして脈々と受け継がれている。街には優しい音楽が流れ、歩く人々はマナーを守り譲り合い、手入れの行き届いた草花が足元を照らしている。昔の姿にこだわり凝り固まるのではなく、変わりゆく時に寄り添いながらも、変わらずにあり続ける国立らしさが国立の魅力だ。

落語観劇と新宿探訪

阿部正行

十二月四日（金）落語観劇会を開催し、九名（重野ご夫妻・堀田ご夫妻・前嶋ご夫妻・石井氏・太田氏・阿部）が参加しました。落語の定席は、東京都内に新宿末広亭、上野鈴本、浅草演芸ホール、池袋演芸場があります。今回、木造建築で昔の寄席の雰囲気が残っている新宿末広亭を観劇しました。内部は真ん中が椅子席、両サイドが畳席、二階がある造りです。

落語家団体は、落語協会（柳家市馬会長）・落語芸術協会（桂歌丸会長）・落語立川流・円楽一門会に分かれています。新宿末広亭は落語協会、落語芸術協会の二派が持ち回りで行っています。毎月十日ごとに上席、中席、下席と区分しています。当日は落語協会の担当でした。昼の部は十二時に開演ですが、その前の十一時四十五分に前座が行い、終了は十六時三十分ごろです。夜の部は十七時開演です。

前座はプログラムに名前が掲載されません。前座の仕事は楽屋でのお茶出し、着物の整理、高座（舞台）での座布団返し、演者札の取り換え、荷物運びなどです。よく演目は、「つる」（鶴の名前の由来をご隠居さんに聞き、なかなか覚えられない八五郎の話）が多いです。しかし真打の「つる」の話を聞くと技量の差が出てきます。

演目も滑稽噺・人情噺・怪談噺・芝居噺があります。当日は林家三平がいろいろな落語家の小話を披露しましたが、テレビタレントとして見ているのと違って面白いし、ツボを心得ていて感心しました。三平は中央大学経済学部卒業生です。

中央大学卒業の国立白門会でお世話になりました三遊亭竜楽さんは、定席に出られないのでホール落語や独演会を行っています。寄席の給金は非常に安いです。さて本来落語の話は長いのですが、寄席ではひとり十五分の持ち時間ですので、落語はさわりの部分だけや小話になります。同じ話でも話す人によってそれぞれの流派（三遊亭・入船亭・桂・古今亭・柳家・金原亭・林家等）や師匠によって同じ題でも話す言葉が変わることがあります。昼の部の主任（トリ）は、入船亭扇遊さんの「厩火事」、三十分以上の持ち時間があります。最初から最後まで話す大ネタ（芝浜・らくだ等）や、毎日違う演目をしますので、数多くのネタと技巧を持ち、客を呼べる者しかなれません。

入場料は三千円、六十歳以上は二千七百円です。昼の部、夜の部の入れ替えはありません。落語以外に俗曲・紙きり・漫才・声色・奇術・曲芸・大神楽・漫談・物まねがあり十八名前後が出演します。一日遊ぶには安い金額だと思います。

昼の部を終了後、懇親会を新宿二丁目の「うおや一丁」に移り、寿司を食した後、花園神社を見学、一九七〇年代は唐十郎率いる紅テントを境内に張って、アングラ演劇を行った場所です。

次に隣にあるゴールデン街を探索しました。昔は野坂昭如、大島渚、赤塚不二夫、殿山泰治等個性の強い人たちが出入りしており、作家・演劇人・映画人・ライター・おかま等が路上でけんかがよく見られました。現在では外国人観光客の人気になり、観光スポット化しています。彼らは値段が書いていないことやお通しのシステムが理解できないことでトラブルが発生しています。店の雰囲気も若い女性も来るようになり変わりました。私たちの探訪したのが午後七時三〇分過ぎでしたので店が開いていません。大体二十一時過ぎないと営業していません。

歩きながら歌舞伎町に。新宿コマ劇場跡は、九階から上がホテルになっている新宿東宝ビルに変貌しました。八階の屋上にはゴリラの頭のモニュメントがあって話題になっています。歌舞伎町は今も変わらず、いろいろ怪しい店が集まっているところで呼び込みが多くて人通りが多いです。私の学生時代は、歌舞伎町から御茶ノ水の東京医科歯科大学前まで都電が通っていたので、朝まで飲んだ時は乗っていました。

つづいて新宿西口の「おもいで横丁」。昔は通称しょうべん横丁と言っていました。トイレがなく真ん中の共同便所があるだけなので、そう呼んでいました。当時は、どんぶり飯の大と普通、鯖、肉じゃが、フライを選ぶ一膳飯屋、定食屋が数多くあり、常連は学生やひとりものの労働者が多かったと思います。今は従業員も中国人になり、添乗員が外国人を連れてくる状況になりました。ごちゃごちゃした感じは、戦後のやみ市の残照でしょうか。最後に西口駅前で解散しました。

落語は心のなごみと日常生活からの解放、不夜城の新宿からはエネルギーを受けた一日でした。

新宿　末広亭

うおや一丁

第六十回 クリーン多摩川の集い

実行委員長　丸本　大

寒のもどりかと思える寒さの中、三月十三日　国立市河川敷グランドにて早朝より五〇〇名の参加者が集結して第六十回クリーン多摩川の集いが開催されました。

一九八六年（昭和六一年）クリーン多摩川国立実行委員会が結成されて、今年で三十周年を迎え、常時登録団体も二十七団体を数え、一般市民の参加も加え、他市からも参加する迄に成長してきました。

結成前は、各団体が個別に、多摩川河川敷の清掃をしていました。その頃、立川の河川敷で立川クリーン多摩川実行委員会が設立されており、国立市内の一部の団体は、そちらの催しに参加していました。国立市にもある多摩川を合同で清掃しようと呼びかけて市内の青少年育成団体やボーイスカウト、ガールスカウト等、地元の自治会を含め協同して清掃することにしたのが始まりでした。

スタート時は十団体ぐらいでしたが、次々に参加団体が増え、清掃だけではなく、自然観察も加え、野鳥、野草の定期観察、更には水質検査も子供達と行い、多摩川の自然に関心を持ってもらう企画を実施。又せっかく多摩川の清掃に参加したので、昼時にうどんの給食を提供することになり、今や子供達の楽しみの一つとなりました。

この行事は、市の行事の一つになり、行政の協力はもとより参加する大人の団体の支援により維持されています。一〇〇名以上の子供を有する青少年団体は、一回開催の参加費は千円程度で、大人の団体は三千円～五千円の協賛金で成立っています。

開催十年毎に活動報告文集の小冊子を発刊していますが、この費用の一部は、国立市文化スポーツ振興財団からの助成金を頂戴して賄っています。

この三十周年記念事業として、昨年には、多摩川河川敷グランドにて「国立まと火」を国立まと火実行委員会と共催して実施することが出来ました。今後ともこの催しが継続して開催され、青少年の皆さんの思い出として、心に残ってくれることを願っています。

2016.3.13

国立白門会「のぼり」の作成とホームページの開設

1.国立白門会ホームページを開設しました。

http://www.gakuinkai.com/kunitachi/

2.国立白門会メールアドレス

kunitachi@gakuinkai.com

3.国立白門会 Facebook

中央大学学術講演会

台湾「日本語族」が、日本の若者にもたらすもの

中央大学経済学部教授
中川 洋一郎

例年好評の中央大学主催学術講演会が、十月十八日（日）午後三時から、せきやビル七階エソラホールにおいて市民参加でおこなわれた。

演題は、『台湾「日本語族」が、日本の若者にもたらすもの』である。日本語族とは、聞き慣れない言葉であるが、戦前日本が台湾を統治していた時代に、台湾で生まれ日本の教育を受けた台湾の人々のことである。流暢に日本語を話す現在八十歳以上の方々で、現役でご活躍している方もいらっしゃいます。この日、講演会場で全員に「台湾の歴史」許 文龍著の贈呈を受けました。

【許 文龍（きょ ぶんりゅう）氏のプロフィール・奇美実業董事長（ABS樹脂で世界一の企業）八五歳　一九九六年より李登輝総統の国策顧問、政府行政改革役、平成二五年秋、日本で外国人叙勲受賞（旭日中授章）】

講演内容

一　「台湾の小史」について

原始から近代まで、清時代、日本時代、中国国民党時代の四つに分け、それぞれ時代の歴史的事実を解説された。江戸時代、台湾は高砂国と呼ばれ国主なき地であった。

一六〇九年オランダは、台湾南部を占領してから、三十数年オランダ時代が続いた。鄭成功（ていせいこう）（一六〇四～六二）は、二五〇〇〇人の兵で、台湾のオランダ人を駆逐した。この後二二年間の鄭氏の時代が続くが、新国家建設ではなく、大軍を養うための軍事拠点にすぎなかった。中国大陸では、明が滅び清の時代になっても、台湾は、「海禁の島」であり、渡ることを禁じた「海外」と見ていた。

一八九五年、日清戦争が起こり、下関条約で台湾は、日本領になり、五十年の統治が続いた。

許文龍氏は、この日本時代が「台湾史において、最良の時代だった」と述べている。

日本人が撤収した後、大陸から来た国民政府になり、住民への弾圧と殺戮を繰り返す、悲惨な時代になり、「二・二・八事件」が起こった。この間、戒厳令は世界最長の三八年間（一九四九年～一九八九年）続いた。中川教授ご自身そのことに無知であったと述べられていた。

中川教授はこのことがきっかけとなって毎年学生を連れて台湾でゼミ合宿をするようになった。過去十回で総勢一三〇人の中大生と訪台されているという。

二　台湾を通して世界・日本・自分自身を理解する

ここでは、列強諸国に翻弄された台湾、シナ大陸における「中国」との地理的・歴史的特異性。そして、日本統治の評価「日本とは何か」という問いかけに解説された。

台湾農民は、オランダ時代から搾取される農民のままであった。日本の統治時代「日本とは何か」を考える。そこから、日本の本質が見えてくる。また、台湾人と中国人の本質的違いは、「公」という観念の有無であるとも述べてみたい。

次に、会場で頂いた許文龍著「台湾の歴史」（二〇一二年四月修改訂版）の一部を要約して述べる。

一　統治前は、社会不安、飢餓などで、土匪（強盗）が多く自衛したが、統治後は、社会が安定し、その必要がなくなった。

二　欧州型統治は、搾取する型（スペイン）などだが、日本は、投資型で膨大な人力、資材をインフラの整備等につぎ込んだ。更に一流の人材（後藤新平他）を台湾に大勢つぎ込んで、台湾経済発展に大きく寄与した。

三　総督は、文人総督が多く、綿密な地積・人口調査、更に経済法、行政法等の整備をおこなった。

四　台湾銀行を設立。調査を元に主幹産業、精糖をはじめ港湾、発電等の基礎インフラの整備。更に農業、水産、林業、鉄道の整備・充実をはかった。

五　保健衛生及び病院の充実。当時台湾には、マラリア、赤痢等伝染病が常に流行し、平均年齢は三十歳余りだった。東京にもない上下水道を完備させ、予防接種実施など、その後死亡率は、日本内地と変わらなくなった。

六　教育行政は、日本内地と同じ教育システムによって一九四三年には、児童の就学率が、七一％にまで達した。（欧州型統治では、教育を施すことはない）

許文龍氏は、更に次のように述べている。

○当時の教育が、資産となってその後の台湾の経済発展の重要な基礎の一つになった。

○日本人、八田与一によって造られたアジア最大の烏山頭ダム建設、曽文渓ダム設計によって、嘉南平野が大穀物宝庫になり、今日も台

湾の大きな財産になっている。

○日本人にも、問題があった。異民族台湾人の反乱を恐れて皇民化運動を進めた。日本式の改姓名、日本語常用、日本服着用、神社参拝など奨励したが強制はしなかった。

○日本人の、南京大虐殺が話題になるが、台湾で無差別殺人はしなかった。日本が引きあげた後、大陸から来た国民政府によって非人間的な惨殺がおこなわれた。教科書や教室ではふれていない「二・二・八事件」で多数（一万八千～二万八千人）の無実の人が国民党に殺された。戒厳令で表に出なかった。しかし、李登輝総統になってから自由に話ができるようになった。（事件で、多くの学識経験者が殺された。その中に中大を卒業した台湾人もいた）

○歴史を読むとき、客観的立場で批判すべきであり、教科書通り「日本人は、台湾人を搾取した」と単方向的な思考法であってはいけない。

三　ゼミ学生が感じた台湾

・三つの国を生きた人々の話を聴いて・・

日本語族はオランダ、日本、中華民国を生きてきたこと。女性の一人が「なぜ、台湾をお捨てになったのですか」と問いかけられたこと。「日本と日本人とが享受する例外的な環境への覚醒」などのお話があった。

中川先生は、日本語族の方が「私は日本人であったことを誇りに思います」と述べていること。そして「日本の若者と話すことを好み」日本の若者に向かって「日本は素晴らしい国だ。あなた方は、日本に生まれた幸せを感じなさい」と叱咤激励をする。

八十歳代の台湾人と二十歳前後の日本人とは背景が違いすぎるが、話を聞いて「これまで自分が教わってきたことは、事実でないかも知れない」と思い当たる。　日本、世界について「本当はどうだったのか」と問いはじめ。好奇心のプラグに点火するきっかけが生まれる」と述べられています。

最後に、日本語族の方による和歌の紹介がありました。

●万葉の　流れこの地に　留めむと
生命のかぎり　短歌詠みゆかむ

●指を折り　短歌詠み居れば　大和
ことばが　次々とわく

●植民の　日の面影は　正座する
我れの姿勢に　今も残れり

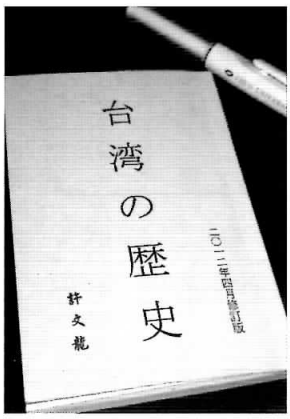
この度の講演は、台湾を深く理解し、日本との関わりを再認識する貴重な機会となりました。

なお、講演の中で司馬遼太郎著「街道を行く 四十 台湾紀行」の内容に触れるお話がありました。

【註】講演後の十一月五日～九日、国立白門会十二名が訪台し、中川先生から紹介された新亜旅行社社長の「張 幹男氏」、台湾白門会役員の「方伯仁氏」とお会いして、お話を聞き、交流を深めてまいりました。

詳細は「国立白門会ホームページ」を御覧下さい

【重野 和夫　記】



国立白門会「台湾の人々の心に残る日本人の足跡と台湾の史跡を訪ねる旅　2016.11.5～9

教育の普及、産業の振興に尽力した日本統治時代について、熱く語られた「張 幹男 氏」(中央)。氏は日本人と共に教育を受けられた。「皆さんはもっと自信を持ちなさい」と叱咤激励された。

嘉南平原を穀倉地帯に変えた烏山頭ダムの建設に尽力した日本人技術者　八田与一　の銅像

こわ～い話

市川良夫

昭和十六年小学二年生の時、私は家族と共に父の外務省領事館警察署の任地、中国山東省の青島（チンタオ）にいた。

ご存知の人も多いと思うが、青島は十九世紀にドイツが租借し、第一次世界大戦をきっかけに日本が青島を攻略して占領した土地で、その際、海軍航空隊が初めて赤トンボで渡洋爆撃を敢行し、後部座席の搭乗員が目視でドイツ軍要塞に爆弾を投じたことでも知られている。地下要塞にはドイツ傷病兵の阿鼻叫喚の様を窺わせる血塗られた壁の跡がまだ残っていた。

街路はドイツ風の赤い屋根の洋館が立ち並び、ドイツ人のほか白系ロシア人などの店が軒を連ねていた。街路樹は明るい淡緑色のアカシア並木に覆われ、至るところに広々とした公園が広がり、街の中心の高台にはカトリック教会が聳え、雨上がりには尖塔が霧に烟っていた。当時、東洋一と言われた広大な美しい砂浜の海水浴場もあり、夏には学校で引率されて海水浴に出かけた。

春節には中国人のカラフルな高足踊りが海岸の大平路を練り歩き、海軍記念日と大詔奉戴日には海軍の軍楽隊が行進し、また沖合には戦艦長門も停泊して、海軍のランチが桟橋から一般見学者を送り迎えしていた。

「こんにちは赤ちゃん」「黒い花びら」「上を向いて歩こう」の作曲者中村八大が青島で生まれたことで知られているが、その名曲を生んだ背景・素地は、この街の風土・環境と無縁ではないような気がする。

青島には日本人の外交官・警察署員、三井物産などの大手商社マン・中小商業者、中学・高等女学校の関係者・生徒なども多く、その誰もが青島をこよなく愛した。「♪長い桟橋、回瀾閣（かいらんかく）に、ほんに絵のような加藤島♪…」で始まる「青島小唄」の民謡もあり、私はいつどこで覚えたのか、今でも一番の歌詞を口ずさむことができる。

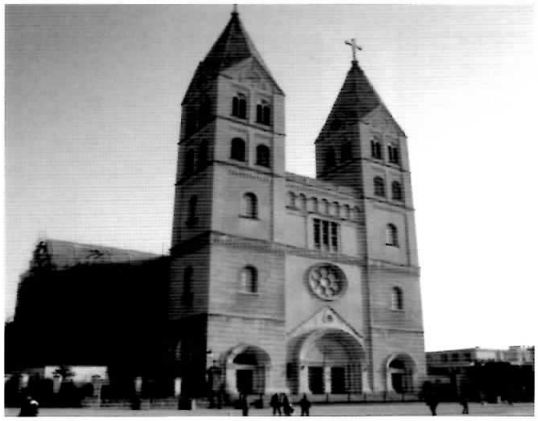
しかし、中国人による日本人児童誘拐の危険もあった。第一中学校長の息子が拐われ、行方不明になったことが公知の事実として知られていた。私もそんな怖い目にあったことがある。

ある日の放課後、学校に忘れ物をして教室まで戻って探したが見当たらず、途方に暮れて、大平路から海辺に出て、沖合を見つめていた。暫くすると、一艘のジャンクが帆を下ろして浜辺に近づいてきた。ふと多少の不安もあったが、中国人の巡警が乗り合わせていることだし危険はないだろうと思い、（しかし浜辺まで来て何をするのだろう、と）訝りながら、突ったまま眺めていた。

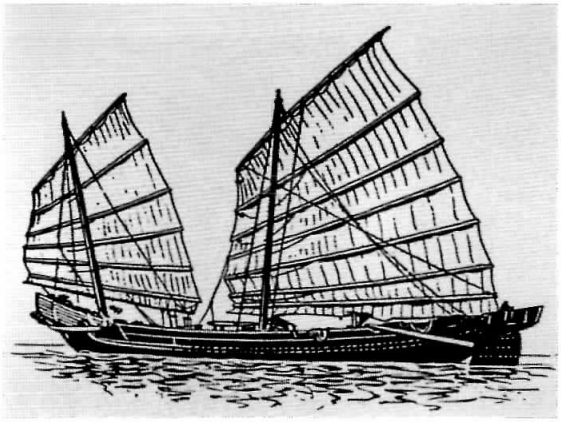
ジャンクが波打ち際まで来た時、いきなり舳先にいた船頭が艫綱を握って飛び降り、波を蹴散らしながら私を目がけて突進してきた。

「人拐いだッ！」とっさにそう判断して、大平路目ざして突っ走った。私との距離は五メートルも離れていなかったと思う。大柄の男だったが、砂浜に足を取られて速く走れず、一方、私は子供で身も軽く、それが幸いして追いつかれず、土手の階段を上りきって、大平路に出た。（人通りもあり、もう安心だ）。振り返ると、その中国人は、諦めて交差している反対側の石段を降りて行くところだった。その時の私の心境はどうだったか、恐怖心で震えたとか、夜中に悪夢に魘されたとかの記憶は全くないが、ただ拐われていたら自分の運命はどうなっていただろうかという怖い思いは、その後も残っていた。いまこの一文を認めながら改めて、何かに怯えて目覚めることがあった遠い記憶を思い起こしている。

…中学校長の息子の行方は分からず終いのままだったのだと思う。



青島のカトリック教会



中国のジャンク

歴史発見の旅（出雲）

古事記に学ぶ出雲神話

重野和夫

歴史発見の旅、「古事記に学ぶ」は天孫降臨の日向（宮崎）から、太安万侶によって書かれた奈良飛鳥へと続けたが、大国主命が活躍する出雲を加えなければ旅は終わらない。

出雲神話の旅は、米子空港から古事記・出雲風土記に関わる古社、伝承地、遺跡、古墳等を訪ねた。

一　出雲神話のあらまし

古事記による出雲神話は高天原で乱暴狼藉を働いた須佐之男命は、罰として神の資格を剥奪され、葦原の中つ国（地上）に追放され、出雲の国の肥の川（斐伊川）の上流に降り立った。

ここから物語が展開される。まず須佐之男命による八岐大蛇退治と櫛名田比売の結婚、須佐之男命から六世の孫にあたる大穴牟遅による因幡の白兎物語。様々な苦難を乗り越えて、大穴牟遅から大国主神に成長する物語が続き、やがて大国主神になり出雲（葦原中国）を支配する。

その後、天照大神が支配する天上界からやって来た建御雷神は、大国主神および子供の、事代主神と建御名方神三神に国土の譲渡を迫った。トラブルがあったものの結果として、「此の葦原中国は、天神の御子の命の随に献らむ」といって無条件で国譲りを承諾し、大国主神は引退してしまう。ここで出雲の神々の活躍は終了する。

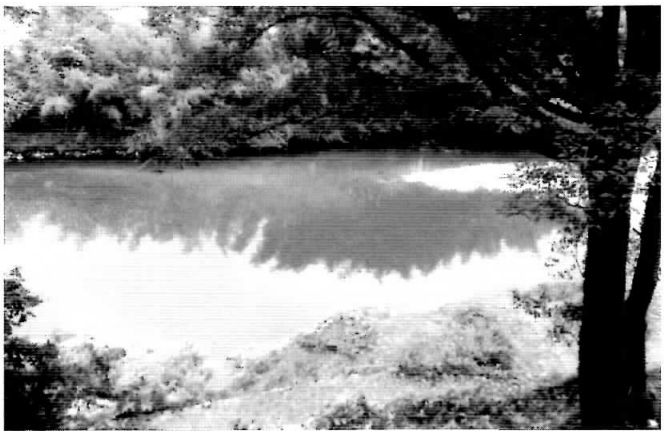
この後は、天照大神の孫の能邇邇芸命が「天津日子番能邇邇芸命天意志位を離れ、天八重多那雲を押し分けて、いつのちわきちわきて、天浮橋に、うきじまり、そりたたして竺紫日向の高千穂のくじふるたけに天降り坐しき。」と地上（高千穂峰）に降り立ったのである。

二　八岐大蛇伝説地

須佐之男命が、出雲の国の肥の川（斐伊川）の上流に降り立ったその場所は、現在の雲南市とされる。まず市役所を訪ね、受付の女性に「八岐大蛇を訪ねて来ました」と云ったら、一瞬びっくりした様子。理由を丁寧に話し、産業振興部観光課の女性係長から古事記伝説に関わる資料と、丁寧な説明、案内をしていただいた後、次の伝承地を訪ねることになった。

八岐大蛇公園　肥の川（斐伊川）の上流から流れてきた箸を、須佐之男命が見つけて、拾ったという場所に、須佐之男命と八岐大蛇の対決する石像があり、公園になっていた。川幅、水量共、国立を流れる多摩川より遥かに大きく、箸が流れてきても見つけることは不可能であろう。現状から当時をイメージすることはできなかった。

天が淵　上流に、八岐大蛇が住んでいた場所、酔いつぶれ逃げ込んだ場所と伝えられているところがある。川幅が狭く折り曲がった淵が深く落ち込んで、強い流れが止まり、淀みになっている。川底は赤く、いかにも大蛇が住んでいるような不気味さを感じた。この地域には、大蛇にまつわる神楽舞もあるという。お神楽を拝見したいものである。



天が淵

菅谷たたら　たたらとは、鎌倉時代から続く日本独特の鉄（和鉄）づくり。菅谷たたらは、唯一当時の面影を見ることが出来る。この辺りは砂鉄が多く取れて、江戸時代には国の七～八割を生産していた。川底が赤いのは、酸化鉄のためだという。八岐大蛇の赤い血、八岐大蛇の尾から剣（草薙の剣）が出てきたなど、古事記と関わりがありそうだ。（菅谷たたらは重要有形民族文化財）

三　揖夜神社と黄泉比良坂

雨の中の揖夜神社は、荘厳さと気品に充ちて、女千木が周囲に調和して神秘的で美しかった。

御由緒書によると、主祭神は、伊邪那美命。古事記、上巻に伊賦夜坂の記述、日本書紀（六五九年）や出雲国風土記に「伊布夜社」「揖夜神社」の記述がある。平安朝以前に広く知られた古社。

黄泉比良坂についても、記紀神話に登場する黄泉の国（根の国）との境で社の近くにあると記されている。古事記では、伊邪那岐命は、亡くなった妻の伊邪那美命を忘れることが出来ず、黄泉の国まであとを追っていったとある。

黄泉比良坂つまり、伊賦夜坂は、揖夜神社から小さな山を越えた裏側にあった。ここ黄泉の国入口での、

二人の会話を古事記から拾ってみる。

死んでしまった妻、伊邪那美命を訪ねて、黄泉の国（あの世）を訪ねた伊邪那岐命は「最愛の妻よ、お前と造った国はまだ未完成である。どうか戻って来てくれないか。」「残念ですわ。もう私は、黄泉の国の食事を食べてしまったので、帰ることは出来ません。でも、愛するあなたが来てくださったのですから、黄泉の国の神と相談してみましょう。その間、私の姿を決して見てはなりませんよ」

妻は堅く約束して御殿の奥に消えていった。　伊邪那岐命は待っていたが妻が戻らないので、約束を破って御殿の内に入ってみた。そこで見たものは、おぞましい妻伊邪那美命の腐乱死体だった。

恐れおののいて、黄泉の国から逃れようとした。ところが妻伊邪那美命は、「約束を破り、私に恥をかかせましたね」と責め、黄泉の国の魔女を集めて伊邪那岐命を追跡させた。伊邪那岐命は、迫り来る魔女軍団に鬘や櫛の歯を投げ、腰の長剣を振り回し魔力を断ち切りながら逃げた。この世と黄泉の国（あの世）の境、比良坂まで来たとき、桃の実を三つ投げつけた。すると桃の霊力によって、魔女軍団は全員退却したが、妻伊邪那美命だけはなおも追ってきた。

伊邪那岐命は、巨大な岩で比良坂を塞ぎ、岩を通して二人は向かい合って、夫婦は最後の言葉を交わした。現在、その場所に大きな石が残っていて、伊邪那岐命が、黄泉の国に行くために通ったという細い山道が、狭く暗い谷間に伸びて、今でも怨霊が漂うかのようであった。

黄泉比良坂・伊賦夜坂

その谷は「つけ谷」と呼ばれている。伊賦夜坂入り口付近は、現在、揖屋附谷地区という。黄泉比良坂つまり伊賦夜坂も、島根県東出雲町の揖夜平賀地区となっている。

四　出雲大社

県立古代出雲歴史博物館で、出雲大社本殿前遺跡から出土した巨大な「宇豆柱」や、八名の建築設計者の想像する神殿模型を見学した。その後出雲大社に向い、大国主神（大穴持命）を祀る本殿を参拝した。

本殿前に丸い大きな御影石で示された場所がある。説明がないと見落としてしまいそう。それは、巨大神殿の遺構である。平成十二年に大きな杉の木が三本一組になって、発掘された跡なのだ。古代の巨大神殿の一部とされる。（説明では、鎌倉時代の柱とされる）

宇豆柱発掘跡

本殿前から発掘された巨大な宇豆柱

出雲大社は、昭和二十七年国宝に指定されたが、出雲風土記には、郡毎の神社名の一覧記載がある。すでに七００年代には意宇郡の熊野大社と出雲郡の杵築大社（出雲大社）は、大社としての神社の冒頭に出てくるが、風土記では他の神社と同じように、所在地や由来について、特別な記述はないが、特別な扱いを受けていたようである。

風土記の出雲郡には、用材を切り出す山まで記されており、巨大な社殿造営に関わっていたことは、確かであろうという。杵築大社につづいて、御魂社、御向社、出雲社の記載があり、杵築大社に付属した神社であるらしい。また、奈良時代の神社の遺構は見当たらないが、位地は当時と大きく変わっていないとされる。付近の鹿蔵山遺跡では、奈良時代の高級調度品、多数の墨書土器が出土している。それらは大社に関わる施設の一部とされている。

いただいた案内書によると、出雲大社は縁結びの神だという。なぜだろう。その理由には、「神在月（十月）には全国八百万の神々が、稲佐の浜に集まって、男女のご縁などについて、会議される」と説明があった。

自分は、古事記、風土記を読むことを勧めたい。その中で活躍される大国主神の物語、特に登場する若く

美しい女性の神々とのロマン、神事を知ることによって、あらためて大国主神を祀る出雲大社を知ることになるでしょう。【註・古事記に出てくる稲佐の浜は、大国主神が天照大神に国譲りを承諾した場所とされる。】

五　神在月があるわけ

十月は神無月であるが、出雲では神在月という。全国の神様が，出雲の稲佐の浜に集まる。そのため出雲大社内には、神々が泊まられる立派なホテルも存在する。それは、古事記、日本書紀に登場する多くの神々が、千三百年以上の歴史を経た現在にまで、脈々と受け継がれ、出雲に神社がこれほどあっては、神在月は当然のことだと納得してしまうのは、私だけであるまい。

訪ねた時期は、平成二十六年十月初めであった。ちょうど出雲大社神職、千家国麿さんと皇室の高円宮典子さんの結婚式を二日後に控えて、出雲の国は喜びに溢れていた。きっと古式に乗った結婚式が行われるであろうと密かに期待していた。　古事記にある結婚の儀式では、男神の伊邪那岐命、女神の伊邪那美命は「然らば吾と汝らと、是の天の御柱を行き廻り逢いて・・・汝は右より廻り逢い我は左より廻り逢はむとのりたまひて契り竟へて・・・」（それでは、あなたと私は聖なる柱を廻りましょう。あなたは右から廻り、私は左から廻り、出会ったところで結婚しましょう）とある。儀式前後の二神による人間的な会話は、古事記で味わえます。

帰京後、十月六日付新聞報道による図式を見て、出雲大社におけるお二人の結婚式が、古事記に示されたように行われたことを確認することが出来たのである。

出雲では、今も神々が生活の中に、確実に息づいていていることを、実感する出来事であった。

六　古事記と出雲風土記

古事記は、天武天皇が中央集権国家の君主確立を目指す中で、編纂されたものであり、「天皇家のための歴史書」である。という考え方がある。その後、日本書紀の完成によって、天皇の支配や国の成り立ちが確立する。和銅六年（七一二年）には、官令により全国に風土記（当時風土記という名称はない）撰進の命令が出された。

現存する風土記は、出雲（島根県）、常陸（茨城県）、豊後（大分県）、肥前（佐賀・長崎県）、播磨（兵庫県）の五ヶ国である。しかし、千三百年経過した現在、いずれも完全な原本は見当たらない。

その中で、出雲国風土記は、江戸時代から今日まで、検証、実地踏査など、様々な過程を経て、ほぼ完本に近い唯一つのものとされる。出雲では出雲国造出雲臣らによって、官令から二十年後の天平五年（七三三年）に「風土記」が完成している。

出雲風土記の内容は、所産する金、銀や、山川原野の名と土地名と由来、駅家（駅）、古老の伝える旧聞異事等、史籍の総括記述である。出雲国意宇郡はじめ九郡の様子を詳しく記している。

古事記と出雲風土記は、イナバのシロウサギ、八十神による受難、根の国の試練、小彦名命との協力による国造りなど、具体的な類似点は多くある。一方、風土記には、古事記に書かれていない、八束臣津野命の国引きで、出雲国を大きくした神話や、出雲国名の由来等がある。しかし、「八岐大蛇」や「大国主神の国譲り」に直接関連する記述はなく、国譲りをせまった、「稲佐の浜」も登場していない。風土記では、大国主神を大穴持命とよんでいる。

識者は、風土記に見る、大穴持命の神話は、「明らかに古事記の大国主神命の神話を意識して、書かれたと云わざるを得ない」と言い、さらに、古事記の神話と風土記の神話が異なるのは、古事記は、「王権の神話」「君主国家のための神話」であり、風土記は「地方、地域の神話」であると解釈した方が良いといっている。

出雲各地の古社をめぐり事実を確認し、現在に至る歴史を、体験ができたことは素晴らしかった。島根県立古代出雲歴史博物館の売店で求めた「解説・出雲国風土記」には、古代天平年間（七三三年頃）の出雲がより詳しく記されていた。精読し古事記と対比して、二つの神話がそれぞれを補完し合うものと思えるようになった。

最後に、古事記と関わりある、次の場所も訪ね、強く興味を引きつけるものがあった。紙面の関係上詳細は割愛します。

県立古代出雲博物館、西谷墳墓群史跡、荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡、八雲立つ風土記の丘、神魂神社（大社造りは国宝）、熊野大社、八重垣神社、須我神社、美保神社

「古事記に学ぶ」歴史発見の旅は、出雲の神話をもって、ひとまず終了としたい。

参考資料　古事記・角川書店編　角川文庫　新版古事記・中村啓信注釈　角川文庫
解説「出雲国風土記」・
島根県古代文化センター編

平成27年度　国立白門会決算書

自 平成27年4月1日　至 平成28年3月31日　単位:円

収入の部			支出の部		
科目	決算	予算	科目	決算	予算
年会費	210,000	195,000	印刷費	86,461	80,000
総会会費	92,000	120,000	総会費	154,031	130,000
行事活動特別収入	181,788	180,000	事業活動費	68,000	80,000
寄付・祝金	88,000	80,000	親睦行事費	316,479	450,000
学術講演会	193,095	100,000	通信費	28,916	30,000
支部活動強化費	136,000	100,000	会議費	42,160	30,000
雑収入	22		事務用品費	10,665	20,000
前年度繰越金	357,865	357,865	学術講演会開催費	138,077	220,000
			雑費	10,000	20,000
			予備費	51,119	72,865
			次年度繰越金	352,862	
合計	1,258,770	1,132,865	合計	1,258,770	1,132,865

平成28年5月11日

会計　前嶋　清　印
会計監事　二宮　巍　印
上田　邦雄　印

平成28年度　国立白門会予算案

自 平成28年4月1日　至 平成29年3月31日　単位:円

収入の部			支出の部		
科目	摘要	金額	科目	摘要	金額
年会費	3000円×65	195,000	印刷費	白門会ニュース他	90,000
総会会費	4000円×30	120,000	総会費		150,000
行事活動特別収入	さくら祭、市民祭	125,000	支部渉外費	近隣支部総会祝金	80,000
寄付・祝金		80,000	親睦行事費	納涼会等	350,000
学術講演会	中央大学	100,000	通信費	会員連絡他	30,000
支部活動強化費	中央大学学員会	100,000	会議費	役員会他	50,000
			事務用品費		20,000
前年度繰越金		352,862	学術講演会開催費		150,000
			雑費		26,000
			予備費		26,862
			積立金	記念事業他	100,000
合計		1,072,862	合計		1,072,862

平成27年度活動報告　27・4・1～28・3・31

- ＊ 4/ 5(日)　「さくらフェスティバル」雨で中止
- ＊ 6/21(日)　第38回定時総会「エソラホール」
- ＊ 7/19(日)　国立まと火に参加
- ＊ 7/20(月・祝)　納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
- ＊ 9/12(土)　ボーリング会「立川スターレーン」
- ＊ 10/12(月・祝)　「くにたちウオーキング」
- ＊ 10/17(土)　箱根駅伝予選会応援
- ＊ 10/18(日)　中大学術講演会「エソラホール」
- ＊ 10/25(日)　ホームカミングデーに参加
- ＊ 11/ 3(火・祝)　「くにたち市民まつり」に参加
- ＊ 11/ 5(木)　台湾旅行
- ＊ 11/15(日)　秋のクリーン多摩川
- ＊ 12/ 4(金)　落語観劇会と新宿探訪
- ＊ 1/17(日)　新年会「エソラホール」
- ＊ 3/13(日)　春のクリーン多摩川

○ 白門会ニュース49号発行
○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催

平成28年度活動計画案　28・4・1～29・3・31

- ＊ 4/ 3(日)　「さくらフェスティバル」
- ＊ 6/ 3(金)　浅草探訪街歩き
- ＊ 6/12(日)　第39回定時総会「エソラホール」
- ＊ 7/18(月・祝)　納涼会「昭和記念公園」バーベキュー
- ＊ 7/24(日)　国立まと火
- ＊ 9/ 9(金)　ボーリング会「立川スターレーン」
- ＊ 10/10(月・祝)　「くにたちウオーキング」
- ＊ 10/15(土)　箱根駅伝予選会「昭和記念公園」
- ＊ 10/16(日)　中大学術講演会「エソラホール」
- ＊ 10/23(日)　ホームカミングディ
- ＊ 11/ 3(木・祝)　「くにたち市民まつり」
- ＊ 11/中旬　親睦旅行会
- ＊ 11/20(日)　秋のクリーン多摩川
- ＊ 12/16(金)　上野鈴本落語観劇会
- ＊ 1/15(日)　新年会
- ＊ 3/12(日)　春のクリーン多摩川

○ 白門会ニュース50号発行
○ 俳句同好会「中桜俳句会」毎月一回開催